

「地名の歴史と伝承」 第三話

「牛久」という地名が関東平野の茨城県牛久市・

千葉県市原市と袖ヶ浦市・栃木県栃木市にある――

牛久市文化財保護審議委員 栗原 功

栃木市大平町の牛久という地名の伝承

栃木県下都賀郡大平町(同町大字牛久)は、平成22年(2010年)3月に栃木市と合併して栃木市になった。

栃木市大平町牛久の医王山牛來寺に伝わる牛久という地名の由来はなし『サワノメと牛久』のほぼ全文を左に引用してみることにした。

地名の由来はなし

『サワノメと牛久』・医王山牛來寺

牛久は、もともとは「牛來」という文字を使って言い表していたといわれる。またこの地区を走っている部屋街道(栃木・部屋方面)の西側に、土地改良でなくなってしまう今は「サワノメ」という地名だけを残す一角がある。これらの地名の由来を今回は書いてみます。

その昔、日本の仏教の母体となった天台宗第2代目の座主であ

る慈覚大師円仁(796〜864)が、牛の背に揺られてこの地を通り掛かった。牛は疲れたのか、喉の渇きをさかんに訴えていた。大師は辺りを見まわしたが、小川らしいものは何も見えなかった。しかし、何を思ったのか大師は手にした錫杖(僧侶が持ち歩くつえ)を地面のくぼみに突き刺した。すると、不思議なことに、こんこんと水が湧き出てきたのです。大師が牛に『サア飲め』と言ったところから、人々はいつしかその地を「サワノメ」と呼ぶようになったという。また、大師が「牛」の背に揺られて「来」ということで「牛來」という名が起ったということである。ちなみに、牛久には都賀坂東11番札所として、また眼病に靈驗あらたな薬師様の寺として、近隣に著名な医王山光明院牛來寺がある。当寺は、慈覚大師を開祖とし秘仏である本尊薬師如来は、大師の自刻によるものであるという。

平安時代前期の

天台宗僧侶・慈覚大師円仁

慈覚大師円仁は平安時代前期(794年〜864年)の天台宗僧侶。慈覚大師とは朝廷(天皇が政務をとる庁舎)より追諡された号で名は円仁といい、延暦13年(794年)の秋、下野国都賀郡駒家郷付近(現栃木県下都賀郡岩舟町下津原付近)で誕生した。生家の壬生家は第10代崇神天皇の第1皇子豊城入彦命の子孫といわれる名族であった。

円仁は、15歳のとき、大慈寺(現岩舟町小野寺)の住職広智に連れられて近江(現滋賀県)の比叡山に登り天台宗開祖最澄に弟子入りした。籠山行ののち、承和元年(834年)42歳で遣唐大使藤原常嗣に従って入唐。霊場として名高い山西省の五台山巡礼を果たし、長安の青竜寺(空海修行の寺)では密教の奥義を窮めるこ

とができた。

9年の唐滞在を終えて帰国。嘉祥元年(848年)、54歳になった円仁は伝燈大法師位をえ、斉衡元年(854年)には、天台座主に推された。貞観6年(864年)に亡くなったが、最澄とともに朝廷より大師号(慈覚)を追諡された。

伝教大師最澄、弘法大師空海、慈覚大師円仁、智証大師円珍は平安時代の四大師と呼ばれる。

資料提供 栃木県下都賀郡岩舟町教育委員会



↑牛の背に揺られる慈覚大師円仁

イラスト - 医王山牛來寺発行『地名の由来はなし・サワノメと牛久』より。

栃木市教育委員会大平教育支所提供。